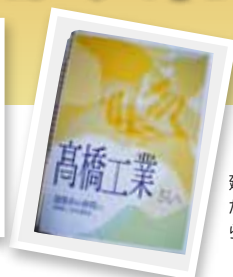


株式会社 高橋工業

どんな状況でも先を見つめ 続けることが、未来への道



建築界の有志「高橋工業応援団」から届いたファイル。中身は、皆からの熱いメッセージ。

波に呑まれた工場

海岸から200メートルの距離に工場を構える、気仙沼の株式会社高橋工業。

複雑な曲面鋼板構造物・立体意匠構築物などの設計から製作・施工までを一貫して行っている。独自技術を駆使し、船舶建造・艦装修繕工事(鋼船、アルミ合金船)だけでなく、異業種の建築業と融合させることで独特のデザインや構造を構築してきた。世界中の建築家やデザイナーの注目を集める企業であったが、10メートルを超える津波の被害により工場は屋根まで呑まれ、今は鉄骨の骨組みが残るのみとなった。

瓦礫の中に残った魚の死骸と、それを食べ肥え太ったハエが飛び回り、あたりは魚の腐ったような臭いがする。「前は泥のにおいだったよ」と、企画・設計課の小野寺氏は海水が引いた直後のことを振り返った。

震災は関係ない

会社の財産である設備は、すべて津波に流された。亡くなった社員も1名いる。しかし震災後、全国から設備や道具が送られ、場所を変えて少しずつだが稼働に向かっている。手元にある道具で鉄の加工は可能になった。けれどアルミの加工はまだ扱うことができない。溶接機を動かす電力がないのだ。発電機の目処がつけば、稼働率は格段に上がる。

津波により工場は全壊し、全機材が流されてしまったため、仕事を他社へ転注するという話もあった。しかし、高橋工業にしかない技術が必要であったため、他の工場では代替できなかった。

「工場を稼働させるっていうのはまずひとつ目標ではある。とにかく、モノを作れるようにすること」と工場長の高橋氏は語る。動かせる道具が限られたなか、「震災だから仕事がこないんじゃない、自分がどうするかが問題だ。いろいろ言い合える間柄や技術があれば、震災は関係なく仕事は来る」と、今できる作業に真摯に取り組んでいる。

目指すのは復興だけでなく、 日本製造業の未来

「今回の震災で、いかに日本の影響力がすごいかっていうのが改めて分かった」。社長の自宅に構えた臨時仮設事務所に、高橋氏は力強く言った。「最先端技術のモノって、日本で製造しているのが多いんだね。だから今回の震災で、さまざまな製品が日本で作れなくなり世界中で困ったという話を聞く。そしてそのすごい技術を持っているのは、日本の中でも中小企業なんだよね」。

震災を経て改めて浮き彫りになった日本の技術力に、高橋氏は自信を持っている。しかし同時に、「あと5年たったら、日本は中国に負ける」と、日本の製造業について先を見据える。いま日本には、多くの中国製製品が溢れている。中国は貪欲に得た技術に工夫を加え安くて良いものを作り出している。今後、中国の技術が高くなると、価格だけでなく品質でも日本は敵わなくなる可能性があるというのが、高橋氏の予測だ。「だから口を開けて仕事を待っていたら、日本はすぐに負ける」と語る。

「応援してくれる人がいるから、頑張るよ」と、震災被害からの復興を目指し、製造業の未来に向かい進んでいる。



「津波で流されたでしょう」と滋賀県立大教授の陶器氏が、かつて提供したコールドレン鋼のサンプルを持参してくれた。表の銅板の文字は、高橋工業応援団員の人数と同じ数をパンチで刻んである。



面識のない長崎の企業が、荷台いっぱいに支援設備を乗せたトラックを貸してくれた。届いたトラックには、「高橋工業」のロゴが入っていた。

Company Profile

- 会社名：株式会社 高橋工業
- 代表者：代表取締役 高橋和志
- 所在地：宮城県気仙沼市波路上内沼38-4
- TEL / FAX：0226-44-3688
- E-mail：master@takahashikogyo.com
- 設立：1985年6月10日
- 資本金：2,000万円
- 従業員：18名
- 業務内容：造船技術と建築を融合する建築構造物・金属意匠工事 水門施設工事(アルミ合金、ステンレス) ほか